

メーワール派細密画 『ギータ・ゴーヴィンダ』

Folio 154 について

三 澤 博 枝

1. はじめに

詩人ジャヤデーヴァ（12世紀頃）によって、クリシュナとラーダーの恋が謳い上げられた抒情詩『ギータ・ゴーヴィンダ』（以下 GG）は、サンスクリット語文学作品の最高傑作の一つとされる。GG はクリシュナ信仰の高まりとも相まって、演劇や絵画など、様々な芸術作品の題材としても人気を博してきた。

GG を主題とした細密画の中でも、インド・ラージャスターン州ウダイプル市の政府博物館に所蔵されている、17世紀後半から18世紀前半に描かれた絵画付き写本（以下 Mewārī GG）は、一偈につき一枚の絵が描かれており、他の細密画と比べて詩の再現度は高く情趣にも忠実な作品とされる。この作品は、インド美術研究者カピラ・ヴァーツヤンによって、美術史的な研究だけでなく、テキストと細密画の関係性についても言及されてきた。氏によると、この細密画は225枚が現存しており、Folio 101～200の所在は明らかでない¹とされる。

筆者のこれまでの調査では、Mewārī GG に非常に類似した2枚の作品がデリー国立博物館に所蔵されていることを確認し、そのうちの1枚が、所在不明とされていた Folio 104 ではないかと指摘した²。そこで本稿では、もう一方の Folio 154 について、絵画の内容とテキストの関係性を明らかにしていきたい。

2. テキストについて

2. 1. Folio のキャプションとテキスト

【Folio 上部のラージャスターニー語 試訳】

gītagoviṃdaropatra |154| vikacajalaja || rādikā saṣī prateṃ kahe hai || vale juvatī kīsī hai ||
vikāsapāyo iso jyo kamala || jaṇī sarīṣo hai muṣa rūpī caṃdra jaṇīro || vale juvatī kisī hai ||
jaṇīro adhara pāṃna karene || balata kāreṃ kīdhau hai taṃdrā jaṇī ||

『ギータ・ゴーヴィンダ』の貝葉 154。「vikacajalaja」開花した蓮。ラーディカーがサ

¹ [Vatsyayan 1987: 136-137]

² [三澤 2019]

キーに言っています。それから、若い娘はどのような様子か。開花した蓮のような使女のように。使女の顔は美しい月のよう。それから、若い娘はどのような様子か。使女は〔あの方の〕下唇を飲もうと、力づくで行いました。使女は疲れました。



図 1 : Folio154 デリー国立博物館所蔵 Acc. No.70.21

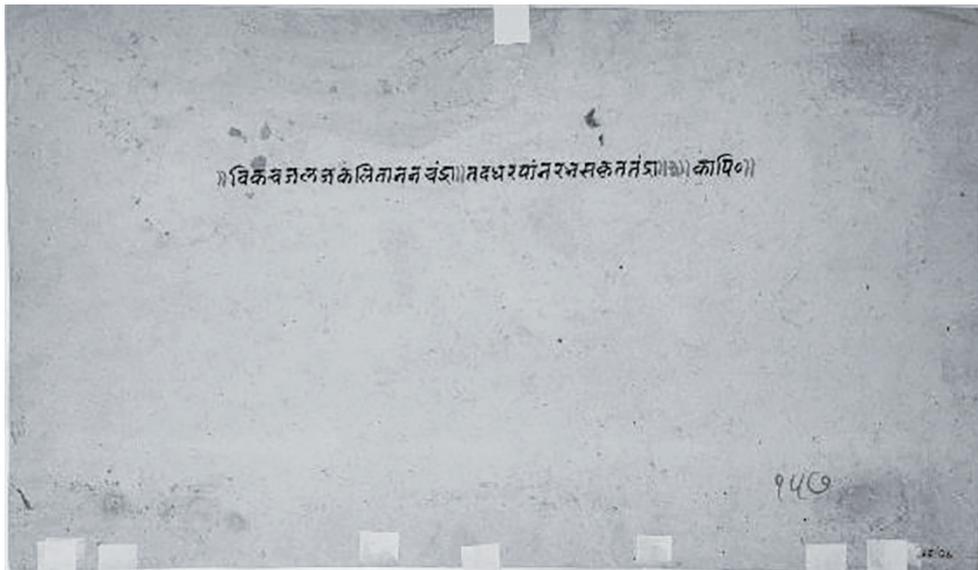


図 2 : Folio154 裏面

絵画的な特徴を確認する前に、図1のFolio上部のキャプションとテキストに注目したい。Mewārī GGのキャプションは、gītagovimdaropatraと始まり、その後にFolioの番号が置かれ、次に描かれた内容の原文となるサンスクリット語の詩句の出だしが書かれる。そのため、どの詩句を描いたものであるかは、キャプションのはじめの部分を見れば分かるのである。また、Folioの裏面にはサンスクリット語の原文も記載されているため、裏面からも場面の内容を知ることが可能である。

図1に示したFolioの場合、「gītagovimdaropatra |154| vikacajalaja」と記されている。つまり、Mewārī GGのキャプションの書き方と同一であり、vikacajalajaではじまる詩句が、このFolioの内容ということになる。このことは、Folio裏面のサンスクリット語からも明らかであり、GG7.14.15が該当する。

GGは、ミラーによる諸写本の校訂によって、小本と大本の二系列に分類されている。小本の典拠とされているものは、ネパールで発見された15世紀頃の二本の貝葉写本と、16世紀頃の三本の紙の写本とされ、そのうちの一つは、マーナーンカ³の註釈付きで、クルカルニ版の校訂本にも使われている⁴。ミラーはこれらの写本について、広く写されていないとしつつも、インド亜大陸のあらゆる地域の写本の中に見られ、GGの最も古い写本に顕著に表れているとし⁵、小本がより原典に近いと主張している。

一方大本は、後に十数詩節を増補したものとされ、註釈者の一人であるラーナー・クンバー⁶によって諸写本から上演に相応しい形に直されたのではないかとされる⁷。このクンバーによる註釈『ラシカプリアー』は、最も早く出版されたこともあって広く知られている。クンバーの註釈を収録したニルナヤ・サーガル版には、シャンカラミシュラ⁸による小本に対する註釈『ラサマンジャリー』も収録されている。これら二つの註釈には、大本と小本の違いはあるが修辞や韻律の説明だけでなく、詩に表された情趣について説かれた箇所も見られる。

小本と大本の主な相違点は、小本の方には各篇の最後に置かれたヴィシュヌ・クリシュナを称え、その庇護を祈る詩節がないことにある。小倉は、これらの詩節はプロットに無関係であり、むしろない方がこの作品の一貫したテンションが保たれると指摘している。

³ マーナーンカは、GGの註釈の中で自身のことを王(mahibhuj)と述べているが、それ以外のことは不明である。ミラーは、註釈が作られた年代を、ネパールの写本とアフメダバードの写本から、15世紀後半から16世紀前半頃と推定している [Miller 1984: 183]。

⁴ [小倉 2000: 128]。G7.14.15がvikacajalajaとなっているものは、インド・グジャラート州のアフメダバードにある、ラールバーイー・ダルパタバーイーインド研究所に所蔵されている写本に見出される [Miller 1984: 198]。

⁵ *Ibid.*, 177

⁶ ラナー・クンバー(在位1433-68年)は、メーワール王国の統治者であり、文化や芸術に精通していた [Sharma 1963: 1-2]。

⁷ [Miller 1984: 187]

⁸ シャンカラミシュラ(15世紀後半)は、ミティラー地方で活動していた詩と戯曲の作家であり、ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の学者ともされる [Gonda 1977: 73-74]

さらに、大本のみに含まれている詩節の中には、構成上不自然さを感じさせるものがあると述べ、小本がより原典に近いと主張するミラーの説に賛同している⁹。

さて、Mewārī GG は、ヴィシュヌ・クリシュナを称える場面が収録されていることから、大本をもとに制作されたと考えられており、ヴァーツヤヤンは、画家とラージャスターニー語のキャプションを書いた人物は、明らかにクンバーの註釈を参照していたと述べる¹⁰。この点に関しては、クンバーの註釈で言われている事柄が、ラージャスターニー語のキャプションの中に見出せる箇所があるため筆者も同意見である¹¹。しかしながら、先に示したように、Folio に記載された vikacajalaja ではじまる詩句は、小本に対する註釈が収録された、クルカルニ版のみに見られるものであり、クンバーが註釈した大本の詩句とは異なるものである。

以下では、GG7.14.15 についてクルカルニ版とニルナヤ・サーガル版とを比較し、詩句の内容とその違いについて確認していきたい。

2.2. 『ギータ・ゴヴィンダ』 7.14.15

GG の第七篇では、クリシュナとラーダーは別離の状態にある。サキーは、彼らの恋慕をかき立てようと、二人の間を行き来する。ラーダーは、自分に会いに来ないクリシュナが、どこかの女と逢引していると想像して苦悩し、次のように女友達に話しかける。

【クルカルニ版】

vikacajalajalalitānanacandrā | tadadharapānarabhasakṛtatandrā ||

kāpi madhuripuṇā vilasati yuvatir adhikaguṇā¹² ||

開花した蓮のように、美しい月のような顔の女。かの者の下唇を貪り吸って疲れきった女。

どこかの優美な若い娘が、マドゥ・リップ¹³と戯れている。

この詩句に対して、マーナーンカは次のように説明している。

【マーナーンカ註釈】

punaḥ kimbhūtā | vikacajalajalalitānanacandrā | vikacaṃ vikasitaṃ ca tat jalajaṃ padmaṃ ca tadvat lalitān ānanam eva candro yasyāḥ sā tathā | vicaladalakalalitānanacandrā iti pāṭhe |

⁹ [小倉 2000 : 127-128]

¹⁰ [Vatsyayan 1987: 66]

¹¹ [三澤 2019]

¹² adhika は「より優れた」等の意味があるが、saundarya と言い換えられている [Telang 1923: 200] ため、ここでは「優美」として訳した。なお、kāpi..... は第十四の歌のリフレインとなっている。

¹³ マドゥ (悪魔的な存在) の敵という意味のクリシュナの異名とされる [小倉 2000 : 93]。

viśeṣeṇa calantaś ca te alakāś cūrṇakuntalāś ceti tair laliṭaḥ ānanacandro yasyāḥ sā tathā |
 punaḥ kathambhūtā | tadadharapānarabhasakṛtatandrā | tasya śrīkṛṣṇasya
 gāḍhāliṅganānantaraṃ yat adharapānaṃ tasya rabhasaḥ kṛdābalāt kāraḥ tena kṛtā tandrā
 sukhānubhavo alasaJaniteṣannatamudratābhāvo [? mudrābhāvo]¹⁴ yasyāḥ sā tathā |

それから女性はどのようなか。開花した蓮のように、美しい月のような顔の女。〈開花した〉〔すなわち〕開いた、その〈蓮〉〔すなわち〕蓮の花、そのように〈美しい〉〈月〉〔のような〕まさに〈顔〉、そのような女性。vicaladalakalalitānanacandrā (揺れ動く髪房の、美しい月のような顔の女) という読みもある。特に、乙女たちの揺れ動く髪房、それらによって月のように美しい顔をしたそのような女性。それから女性はどのようなか。かの者の下唇を貪り吸って疲れきった女。かのクリシュナの、途切れることのない力強い抱擁 (性交)、〔すなわち〕その接吻は、遊戯を行う女性によって力強くなされ、それによって、喜びを享受して〈疲れきっている〉〔すなわち〕疲れが生じて少し俯いた [様子]、そのような女性。

マーナーンカは個々の単語を簡潔に説明しており、韻律や修辭法と言った詩の技巧については述べていない。しかし、大本に収録されている読みも示しており、その読みに対しても簡潔な説明が見られる。また、女に生じた疲れは、力強い接吻を行い、そこから生じた喜びに起因していると説明している。さらに、その疲れによって、少し俯いていると解釈している。

【ニルナヤ・サーガル版】

vicalad alakalalitānanacandrā | tadadharapānarabhasakṛtatandrā ||

kāpi madhuripuṇā vilasati yuvatir adhikaguṇā ||

揺れ動く髪房の、美しい月のような顔の女。かの者の下唇を貪り吸って〔歓喜によって〕疲れきった女。

どこかの優美な若い娘が、マドゥ・リップと戯れている。

この詩句に対するクンバーの註釈は次の通りである¹⁵。

¹⁴ alasaJaniteṣannartanamudrābhāvoh あるいは alasaJanitanimeṣanartanamudratābhāvo という読みも示されている [Kulkarni 1965: 65] が、どちらも意味が不明瞭である。

¹⁵ ニルナヤ・サーガル版には、小本に対する註釈としてシャンカラミシュラの註も収録されている。シャンカラミシュラは vicalad alaka ではじまる詩句に対して註釈を行っている。以下に、参考までにシャンカラミシュラの註釈を示す。

punaḥ kīdrśī | vicalad iti | vicaladbhīś cañcalair adhikaiś cūrṇakuntalair lalito manohara ānanacandro yasyāḥ sā | lālityaṃ cālakānāṃ kalaṅkaśādrśyān mukhe calatkalaṅkavat tvaṃ candramasaḥ pratīyate | punaḥ kīdrśī | tasya kṛṣṇasyādharapānarabhasaḥ tena kṛtā cakṣurnimīlanenāviṣkṛtā tandrā ratisukhānubhavanitā nidrā yayā sā ||

【クンバー註釈】

api ca | vicalad iti | punaḥ kimbhūtā | vicalad alakair lalito manoharo mukhacandrao yasyāḥ sā
tathā | punaḥ kimbhūtā | tadadharapānarabhasena harṣeṇa kṛtā tandrā sukhajanitālikanidrā
yayā ||

そしてまた。vicalat（揺れる）と云う。それから女性はどのようなか。〈揺れ動く髪房〉
によって〈美しい〉〔者〕〔すなわち〕その愛らしい月のような顔の〔者〕、そのよう
な女性。それから女性はどのようなか。〈かの者の〉〈下唇を貪り吸う〉歓喜によって
〈疲れきって〉、愉悦が生じた彼女は、眠ったふりをしている。

クンバーも、個々の単語を簡潔に説明している。月のような顔の女は、揺れ動く髪に
よって美しいとされる。そして、クリシュナに接吻をしたことで歓喜して疲れきっていると
説明される。さらに、悦びによって疲れた女の状態を、眠ったふりとしている。

以上のように、二つのテキストを確認した。二つのテキストにおいて lalitānanacandrā
（美しい月のような顔の女）を修飾する語句に、vikacajalaja（開花した蓮のよう）が使用
されているか、あるいは vicalad alaka（揺れ動く髪房）が使用されているかの違いが見ら
れる他は、詩句の内容は同じである。先に述べたように、Mewārī GG の画家とキャプション
を書いた人物は、大本を参照していたとされる。しかし、Folio 裏面のサンスクリット
語の原文は、クルカルニ版に採用された詩句が記されている。さらに、ラージャスター
ニー語のキャプションにおいても、女（使女）は「開花した蓮のよう」と説明され、「揺
れ動く髪房」とは述べられていない。このことから、Folio 154 は大本ではなく小本の写
本を参考に作成されたと考えられる。

3. Folio の絵画的特徴

次に、Folio の絵画的な特徴を確認していきたい。下の表に示したように、Mewārī GG
の絵画には共通したいくつかの特徴がある¹⁶。ここでは下図3の Folio 89 と下図4の Folio
98 を例に、作品の特徴を比較していく。

それから女性はどのようなか。vicalat（揺れる）と云う。〈月のような顔〉が、〈揺れる〉〔すなわち〕
揺れ動く多くの巻き髪によって〈美しい〉〔すなわち〕愛らしいその女性。魅力的に揺れ動く〔髪房〕
が、顔の中の黒点のようで、黒点（月の海）が動いている月のようだと知られる。どのような女性か。
かのクリシュナの〈下唇をむさぼる〉者は、それによって〈なされた〉〔すなわち〕目を閉じるこ
とによって明らかに〈疲れきっている〉〔すなわち〕愛の喜びを享受することで生じた、それによって
眠そうにしている女性。

シャンカラミシュラは、月のような顔に対して、その顔にかかる揺れ動く巻き髪を月の黒点として説
明している。また、疲れきっている女の状態は眠そうであると解釈しており、クンバーの解釈と類似し
ている。

¹⁶ ヴァーツヤーヤンが示す Mewārī GG のセット1と2は、すべての Folio において絵画の特徴が一致し
ている。セット3においては、明らかに絵画の特徴が異なるため、ここではセット1・2と比較した。

	Mewārī GG の特徴	Folio 154
外枠	一番外枠は赤く塗られ、その上に細く黒い線が引かれる。その内側は橙色に近い黄色が塗られており、上部には主にラージャスターニー語で場面の説明がされている。	一番外枠は赤く塗られ、その上に細く黒い線が引かれる。その内側は橙色に近い黄色が塗られており、上部には主にラージャスターニー語で場面の説明がされている ¹⁷ 。
色彩	鮮やかでパステル調の色合いはほとんどない。緑あふれる樹々や花々が豊かに描かれる。	背景にくすんだ茶色が用いられているが、全体としては鮮やかな色彩である。さらに、緑鮮やかな樹々や花々も描かれている。
褥	草花で作られたアーチ状で描かれる。アーチの部分には白い花輪が飾られている。	白い花輪で飾られたアーチ状の褥が描かれている。褥の描き方に多少の違いは見られるが、Folio 89、98 に類似している ¹⁸ 。
衣裳	<p>【クリシュナ】</p> <p>黄色のドーティーと、その上から短く折り重なった朱色・赤・桃色のスカートを着用しており、真珠や花輪の首飾りなどの装飾品を身に着けている。頭には孔雀の羽飾りのついた被り物が描かれている¹⁹。</p> <p>【ラーダー】</p> <p>一貫して朱色のチョーリーと赤色のオールニーを身に着け、中央が朱色で花柄模様のついた金色のスカートを穿いている。</p> <p>【サキー】</p> <p>中央が垂れ下がった様々な柄や色のスカートを穿き、チョーリーとオールニーを身に着けている。</p>	<p>【クリシュナ】</p> <p>黄色のドーティーを穿き、その上から金色の模様のついた明るい朱色・桃色・緑のスカートを纏っている。真珠や花輪の首飾りなどの装飾品を身に着け、頭には孔雀の羽飾りのついた被り物が描かれている。</p> <p>【ラーダー】</p> <p>朱色のチョーリーと赤色のオールニーを身に着け、中央が赤色で花柄模様のついた金色のスカートを穿いている。</p> <p>【サキー】</p> <p>一人の女性がチョーリーとオールニーを着ており、四角い柄のついたピンクのスカートを穿いている。</p>
場面構成	<p>場面上部には白い線と青色で空が描かれている。</p> <p>場面の下には濃い青色でヤムナー川が常に描かれている。</p> <p>複数の場面が一枚に収められており、時には同じ人物が重複して描かれる。場面は、バナナの木や白い花で飾られた褥や丘のような場所を設けることで区切られている。</p>	<p>場面上部には白い線と青色で空が描かれている。</p> <p>場面の下には、蓮の花が咲いたヤムナー川が濃い青色で描かれている。</p> <p>場面の構成としては、同じ人物が重複して描かれており、Folio 89 と同様に、複数の褥を置くことで場面が区切られている。</p>

以上のことから、Folio 154 は多くの点で Mewārī GG の絵画の特徴に一致していると言える。

¹⁷ 上部にはラージャスターニー語の他に、赤色で大本の詩句が書かれているが、おそらく後の時代に書かれたものだろう。

¹⁸ Mewārī GG が作られた工房の規模は明らかになっていない。褥の描写や、人物の衣裳や顔の描写にはいくつかの違いが見られるため、複数人で制作していたと考えられる。

¹⁹ 多くの Folio でクリシュナは黄色いドーティーを履いているが、折り重なるスカートは描かれていない場合も見られる。



図 3 : Folio 89 [2016 年 9 月 11 日アーハール博物館にて筆者撮影]



図 4 : Folio 98 [2016 年 9 月 11 日アーハール博物館にて筆者撮影]



図 5 : Folio 154

4. Folio に見られる意匠

GG7.14.15 の内容をふまえて、Folio 154 の絵画を詳細に見ていきたい。ここでは上の図 5 のように場面を 1～3 に分けて分析していく。

【場面 1】 下図 6 の拡大図参照

クリシュナとサキーが描かれる。クリシュナは褥の中に座し、身振りを交えてサキーと会話をしている。褥の中には、水や香を入れる容器や花飾りが描かれており、褥の後ろには木々が描かれている。褥の横には、身振りをしながらクリシュナと会話をしているサキーが描かれる。

サキーは GG において、クリシュナとラーダーの仲を取り持つ重要な役割を持っている。二人の間を行き来して互いの様子を伝え、二人の恋慕をかき立てる。この場面は、詩句の中では直接歌われていないが、クリシュナにラーダーの様子を伝えている描写である²⁰。

【場面 2】 下図 7 の拡大図参照

Folio の中心に三体のクリシュナとラーダーそれぞれペアで描かれる。向かって左の褥

²⁰ 図 4 においても、サキーがクリシュナとラーダーの間を行き来する様子が表されており、Folio の構成に類似点が見られる。

の中には、クリシュナがラーダーの首に腕をまわして抱き寄せ、ラーダーはクリシュナの首と脇腹に腕をまわしている様子が描かれている。彼らは互いに見つめ合い、顔と顔を近づけて今にも接吻しそうな描写である。また、褥の中には花や容器が置かれ、褥の横には木々も描かれている。

褥と褥の間にいるクリシュナとラーダーは、互いを抱き寄せて見つめ合う様子で描かれている。クリシュナに抱きしめられているラーダーは、うっとりとした表情でクリシュナを見つめて、腰をくねらせて脚をクリシュナに絡ませている。

向かって右の褥の中では、寝転ぶラーダーと彼女を抱きかかえるクリシュナが描かれている。クリシュナはスカートを取り、ドーティーの姿となってラーダーを見つめながら抱きかかえている。ラーダーは寝転がり、右腕を上げて肘から指先にかけては脱力している。また、左腕も床に垂らして脱力した様子である。さらに、顔はクリシュナから背けており、ぐったりとした様子である。

これら場面2の描写は、美しい女性がクリシュナと戯れて疲れていく一連の様子を表現しており、詩句の内容が的確に反映されている。しかし、本来この詩句は、クリシュナがどこかの女に悦ばされているとラーダーが想像し、サキーに語りかけている詩である。そのため、この場面においては、クリシュナと戯れる女性にラーダーは描かれなければならないはずであり、画家独自の表現が見られる。画家がこの場面の中にラーダーを描いた理由として、ラーダーが自身の姿で想像していると解釈していたと考えられるが、ここでは推測にとどめておきたい。

【場面3】 下図8の拡大図参照

ラーダーとサキーが描かれる。褥の中でラーダーは左ひざを立てて座り、小さく身振りをしてサキーと会話をしている。また、これまでの褥と同様に、花や容器も描かれており、後ろには木々が生い茂っている。褥の横では、小さく身振りをしながらラーダーと会話をしているサキーが立っている。

先に述べたように、この詩句は、ラーダーがサキーに語りかけているため、その様子を表現した場面である。

以上、Folioを3つの場面に分けて、それぞれに何が描かれているか細かく分析してきた。場面1と3の間にヤムナー川が描かれており、クリシュナとラーダーの別離の状態が強調されている。また、詩句にはない場面を描くことで、物語の時間的な流れが表現されている。画家の豊かな表現力が、Folio全体を通して見出される。



図6：場面1 拡大図



図8：場面3 拡大図



図7：場面2 拡大図

おわりに

Folio 154 の絵画は、詩句の再現度の高さや場面の構成や画家の表現力の豊かさなど、多くの点で Mewārī GG の特徴に一致している。そのため、所在不明とされていた Mewārī GG の一部である可能性が高いと言える。

しかしながら、これまで Mewārī GG は GG の大本をもとに制作されたと言われてきたが、この Folio に限って言えば、小本を参考に制作されたと考えられる。なぜこの Folio が小本をもとに作られたのか現時点では明らかではないが、未だ所在が不明である残りの Folio がすべて見つかり、小本がもとになった他の作品が発見されれば、Mewārī GG のセットの構成や年代の詳細が明白になり、インド美術史に大きく貢献できることとなるだろう。

【参考文献】

- Gonda, Jan, 1977, *A History of Indian Literature Vol. VI, 2: Nyāya-Vaiśeṣika*, Germany: Otto Harrassowitz.
- Kulkarni, V. M., 1965, *Jayadeva's Gītagovinda with king Mānānka's Commentary*, Ahmedabad: Lalbhai Dalpatbhai Bharatiya Sanskriti Vidyamandira.
- Miller, Barbara Stoler, 1984, *Gītagovinda of Jayadeva: Love Song of the Dark Lord*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Sharma, Premlata (ed.), 1963, *Saṅgītarāja by Mahārānā Kumbhā Vol. 1*, Varanasi: Banaras Hindu University Press.
- Telang, Manghesh Rāmkrishna and Wāsudev Laxman Śāstri Panśīkar, 1913, *The Gīta-Govinda of Jayadeva with the commentaries Rasika-priyā of King Kumbha and Rasamañjarī of Mahāmahopādhyāya Shaṅkara Mishra*, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, Fourth Edition.
- , 1923, *The Gīta-Govinda of Jayadeva with the commentaries Rasika-priyā of King Kumbha and Rasamañjarī of Mahāmahopādhyāya Shaṅkara Mishra*, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, Sixth Edition.
- Vatsyayan, Kapila, 1987, *Mewari Gīta-Govinda*, New Delhi: National Museum.
- 小倉泰、横地優子、2000、『ヒンドゥー教の聖典二編—ギータ・ゴーヴィンダ、デーヴィー・マーハートミヤ—(東洋文庫 677)』、平凡社。
- 三澤博枝、2019、「別離の恋のラサは細密画ではどのように描かれているか—『ギータ・ゴーヴィンダ』4.19を中心に—」、『2018年度東洋大学大学院紀要第55集』、東洋大学、99-119頁。

キーワード：インド、ヒンドゥー教美術、『ギータ・ゴーヴィンダ』、細密画、メーワール派